

## 7. 爬虫類

### 7-1 爬虫類相の特徴

岐阜市では、市のほぼ中央を東北東から西南西に流れる長良川が沖積平野を形成しており、市の中央部と南部および西部は濃尾平野の一面となっている。濃尾平野部には田園地帯が広がり、河川や農業用水、ため池が多く見られる。一方、市の北部や東部には山林が広がっている。このように、岐阜市役所や岐阜駅のある市の中心部の市街地を除けば、爬虫類の生息に適した土地は豊富である。

爬虫類の調査は、カメ類とトカゲ・ヘビ類とで方法が大きく異なっており、カメはおもに河川や池沼の定点にかごワナを掛けてカメを採集するが、トカゲやヘビはルートセンサス(ラインセンサス)で探索するのが普通である。2009～2013 年度に実施した岐阜市自然環境調査では、カメのワナ掛け調査に重点を置き、トカゲやヘビの調査はカメの調査に付随させて適宜行うとともに、他の部会担当者にも観察と記録に協力していただいた。

調査の結果、表 7-1 のとおり岐阜市ではクサガメとニホンイシガメの交雑種(ウンキュウ)を含む 2 目 9 科 15 種の爬虫類の生息が確認された。これにより、文献・資料調査と合わせると岐阜市内では 2 目 10 科 17 種の爬虫類の生息記録があることになる。これらのうち、在来種については、岐阜県内で確認されている全ての種が市内に生息しており、本市の爬虫類相は豊かであると言える。外来生物としてはミシシippアカミミガメが野外で繁殖していることが確認された。また、ホクベイカミツキガメが市内で保護されたが、まだ野外での繁殖の証拠はつかめていない。

カメ類については、濃尾平野部ではクサガメとミシシippアカミミガメが多く、ニホンイシガメは主に北部の山地に分布していた。ニホンイシガメについては平野部でもまばらに採集されたことから、もともと市域全体に生息していたが、他の淡水棲カメ類の圧迫を受け、現在に至ったものと推察される。

ニホンスッポンは食用として、クサガメは愛玩用としてそれぞれ商業的流通をしている。市内で採集された個体が自然分布のものか人為的に移入されたものかの区別をするのは困難である。

日本産のクサガメは、その起源を朝鮮半島か中国大陸から人為的に移入された可能性を示唆する研究結果が発表されている。しかしながら、最終的な結論は出しておらず、本報告書においては日本列島の在来種として扱った。

トカゲについては、日本列島に広く分布するとされていた「ニホントカゲ」は、東日本と西日本の遺伝的系統に分化しており、西日本のものが狭義のニホントカゲであり、東日本のニホントカゲはヒガシニホントカゲ *Plestiodon finitimus* として新種記載された。現状、岐阜市に自然分布するのはヒガシニホントカゲであったことから、文献・資料の記録を含め、本報告書では「ニホントカゲ」を「ヒガシニホントカゲ」として表記・整理した。

ヘビ類のうちヤマカガシ、ヒバカリ、シマヘビ、ニホンマムシは食物をカエルに大きく依存している。食性の範囲が広いシマヘビとニホンマムシはともかく、カエルを専門的に捕食するヤマカガシと、オタマジャクシへの食性依存度が高いヒバカリについては、世界的な両生類の減少というカエル類の個体群動態<sup>22</sup>の影響を受けないか、注視する必要がある。

<sup>22</sup> 個体群動態：特定の種の個体数の増減といった変化。

## 7-2 岐阜市を代表する爬虫類

岐阜市を代表する爬虫類として、まずは長良川水域の水辺エコトーン<sup>23</sup>の象徴的な種で、日本列島の固有種<sup>24</sup>であるニホンイシガメを挙げる。このカメは全国的に減少傾向にあり、岐阜市でも健全な状態で保全されることが望まれる。

さらに、ロシア沿海地方から北海道・本州中部まで自然分布し、岐阜市が分布の西限に近いヒガシニホントカゲである。新種記載されて間がない種であり、岐阜市の個体群は生物地理学的に興味深いと考えられる。

表 7-1 生息記録のある爬虫類

目名	科名	和名	学名	文献	資料	現地
カメ目	イシガメ科	クサガメ	<i>Mauremys reevesii</i>	○	○	○
		ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i>	○	○	○
		交雑(クサガメ×ニホンイシガメ)	<i>Mauremys reevesii</i> × <i>Mauremys japonica</i>			○
	スマガメ科	ミシシippアカミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>	○	○	○
	ガツガメ科	ホクヘイカミツガメ	<i>Chelydra serpentina</i>		○	
	スッポン科	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>	○	○	○
有鱗目	ヤモリ科	ニホンヤモリ	<i>Gekko japonicus</i>	○	○	○
	トカゲ科	ヒガシニホントカゲ*	<i>Plestiodon finitimus</i>	○	○	○
	カナヘビ科	ニホンカナヘビ*	<i>Takydromus tachydromoides</i>	○	○	○
	タカチホヘビ科	タカチホヘビ*	<i>Achalinus spinalis</i>	○	○	○
	ナミヘビ科	ジムグリ	<i>Euprepiophis conspicillatus</i>	○	○	
		アオダイショウ	<i>Elaphe climacophora</i>	○	○	○
		シマヘビ*	<i>Elaphe quadrivirgata</i>	○	○	○
		ヒバカリ	<i>Amphiesma vibakari vibakari</i>	○	○	○
		シロマダラ	<i>Dinodon orientale</i>	○	○	○
	ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus tigrinus</i>	○	○	○	
クサリヘビ科	ニホンマムシ	<i>Gloydius blomhoffii</i>	○	○	○	
2目	10科	17種	15種	16種	15種	

注)表中の「文献」「資料」の欄は、13-3-1 に示した「文献」「資料」に記載のあった種を示す。また「現地」については、2009～2013 年度に実施した現地調査で記録された種を示す。

## 7-3 重要な爬虫類

岐阜市内で確認されている重要な爬虫類<sup>25</sup>は、表 7-2 のとおりクサガメ、ニホンイシガメ、ニホンスッポンの3種が挙げられる。これらの種は、各種開発行為による生息環境の減少に加え、近年爆発的に分布および個体数を拡大・増加させているミシシippアカミガメの影響も無視できない。このほかヘビ類については、今後さらに分布、生息の情報を集積したうえで、あらためて岐阜市での重要性を考えたい。ニホンヤモリ、ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビについては、現在危機的状況には無く、近い将来においても彼らの生息に危機を及ぼす要因

<sup>23</sup> エコトーン：空間的にあい接する植物群集、植生タイプあるいは生息地タイプの間の狭い移行帯もしくは推移帯。

<sup>24</sup> 固有種：特定の地域に分布が限られる動植物の種。

<sup>25</sup> 重要な爬虫類：以下の6文献に記載のある種を対象とした。

- ・「文化財保護法」：「文化財保護法」(法律第214号、昭和25年5月30日)および文化財保護法に関する条例
- ・「種の保存法」：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(法律第76号、平成4年6月5日)
- ・「県条例」：「岐阜県希少野生生物保護条例」(岐阜県条例第22号、平成15年3月)
- ・「市条例」：「岐阜市自然環境の保全に関する条例」(岐阜市条例第20号、平成15年3月)
- ・「環境省RL」：「環境省レッドリスト-爬虫類-」(環境省、2012年)
- ・「県RL」：「岐阜県レッドリスト-動物編-」(岐阜県、平成21年3月)

は考えられない。

重要な爬虫類の概要・分布状況等については、表 7-3 のとおりである。

表 7-2 生息記録のある重要な爬虫類

科名	和名	文化財保護法	種の保存法	県条例	市条例	環境省RL	県RL
イシガメ科	クサガメ						情報不足
	ニホンイシガメ					準絶滅危惧	準絶滅危惧
スッポン科	ニホンスッポン					情報不足	情報不足
2科	3種	0種	0種	0種	0種	2種	3種

注)表中の各カテゴリーの内容については、以下のとおりである。

環境省 RL 準絶滅危惧：(NT)、現時点での絶滅の危険度は小さいが、生息条件の変化によっては、「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの。

情報不足：(DD)、評価するだけの情報が不足している種。

県 RL 準絶滅危惧：現時点での絶滅の危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。

情報不足：県内において、評価するだけの情報が不足している種。

表 7-3 重要な爬虫類の概要等(1/2)

種名等	種の概要	分布メッシュ	写真
<p><b>クサガメ</b> <i>Mauremys reevesii</i></p> <p>脊索動物門 (CHORDATA) 脊椎動物亜門 (VERTEBRATA) 爬虫綱 (REPTILIA) カメ目 (TESTUDINES) イシガメ科 (Geoemydidae)</p> <p>岐阜県RL: 情報不足</p>	<p><b>【種概要】</b>雌は背甲長25cm弱、雄では20cm弱。背甲に3本の畝(キール)がある。頭部の側面と腹面には黒縁の黄色い斑紋があるが、雄は背甲長約14cm、7歳前後になると体全体が黒化し、その斑紋はなくなる。 配偶期は秋と春で、冬には水底で越冬する。産卵期は6～7月で、1回当たり10個前後の楕円体の卵を年2回産む。孵化個体は産卵巣で越冬し、翌春地上に現れる。 <b>【県内分布】</b>美濃地方の平地を中心に、県南部に分布する。 <b>【市内分布】</b>市内で広く見られるが、北部や東部の山麓地域には少ない。</p>		 <p>撮影: 吉村卓也</p>
<p><b>ニホンイシガメ</b> <i>Mauremys japonica</i></p> <p>脊索動物門 (CHORDATA) 脊椎動物亜門 (VERTEBRATA) 爬虫綱 (REPTILIA) カメ目 (TESTUDINES) イシガメ科 (Geoemydidae)</p> <p>環境省RL: 準絶滅危惧 岐阜県RL: 準絶滅危惧</p>	<p><b>【種概要】</b>本州、四国、九州に固有な種である。雌は背甲長20cm前後、雄は12～14cm。背甲後部がギザギザしている。 配偶期は秋と春で、冬には川や池の水底で越冬する。産卵期は6～7月で、1回当たり6～7個の楕円体の卵を年2回産む。孵化した稚ガメは夏の終わりから秋にかけて地上に現れる。市内の他のカメよりも陸を歩くことが多く、畑地や林床でも見つかる。雑食性である。 <b>【県内分布】</b>美濃地方では平地から山麓部にかけて多く見られる。 <b>【市内分布】</b>市内で広く見られ、北部～東部の山麓地域にも生息している。</p>		 <p>撮影: 吉村卓也</p>
<p><b>ニホンスッポン</b> <i>Pelodiscus sinensis</i></p> <p>脊索動物門 (CHORDATA) 脊椎動物亜門 (VERTEBRATA) 爬虫綱 (REPTILIA) カメ目 (TESTUDINES) スッポン科 (Trionychidae)</p> <p>環境省RL: 情報不足 岐阜県RL: 情報不足</p>	<p><b>【種概要】</b>背甲長は30cmほどであるが、まれに40cm近くになり、体重が7kgを超えることがある。他のカメとは異なり甲には甲板が無く、背甲後部や腹甲全部が柔らかい。水掻きが発達しており泳力は強い。 臆病なカメで、水底の砂に潜んでいることが多い。配偶期間は不明であるが、少なくとも春には交尾をする。初夏に10～30個の球形の卵を産む。水底で越冬する。肉食性の強い雑食性である。 <b>【県内分布】</b>美濃地方のおもに平地の河川や池沼に分布する。 <b>【市内分布】</b>市内で広く見られるが、北部や東部の山麓地域には少ない。</p>		 <p>撮影: 吉川晶子</p>

## 7-4 外来生物法などに係る爬虫類

岐阜市に生息している爬虫類のうち、外来生物法に係る爬虫類としては、表7-4のとおりホクベイカミツキガメが特定外来生物として挙げられる。ホクベイカミツキガメは、アメリカ原産のカミツキガメ科のカメで、甲羅長は最大50cm近くになる。カミツキガメ科として特定外来生物に挙げられている。市内での定着は不明であるが、2004年に岐阜市岩崎で捕獲された記録がある。

また、外来生物法の規制対象外ではあるが、環境省が指定している要注意外来生物の中でアカミミガメが挙げられており、岐阜市ではその亜種であるミシシippアカミミガメの生息が記録されている。このため、ミシシippアカミミガメについても要注意外来生物として扱った。

IUCN(国際自然保護連合)は種(アカミミガメ)として世界の侵略的外来種ワースト100に指定しており、日本では日本生態学会が亜種ミシシippアカミミガメとして日本の侵略的外来種ワースト100に指定している。隣の愛知県では、「愛知県内での野外放逐禁止、愛知県 自然環境の保全および緑化の推進に関する条例」の中で、条例指定種に挙げている。

外来生物法などに係る爬虫類の概要・分布状況などについては、表7-5のとおりである。

表7-4 生息記録のある外来生物法などに係る爬虫類

科名	和名	外来生物法
かみつきガメ科	ホクベイカミツキガメ	特定外来生物
ヌマガメ科	ミシシippアカミミガメ	要注意外来生物

注)表中の各カテゴリーの内容については、以下のとおりである。

外来生物法 特定外来生物：外来生物(海外起源の外来種)であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるもの。

要注意外来生物：特定外来生物被害防止法による規制の対象外であるが、すでに日本に持ち込まれ、生態系に悪い影響を及ぼす恐れのある生物。環境省が指定。

表7-5 外来生物法などに係る爬虫類の概要等

種名等	種の概要	分布メッシュ	写真
<p><b>ホクベイカミツキガメ</b> <i>Chelydra serpentina</i></p> <p>脊索動物門 (CHORDATA) 脊椎動物亜門 (VERTEBRATA) 爬虫綱 (REPTILIA) カメ目 (TESTUDINES) かみつきガメ科 (Chelydridae)</p> <p>外来生物法: 特定外来生物</p>	<p><b>【種概要】</b>トウブカミツキガメ(基亜種ホクベイカミツキガメ)とフロリダカミツキガメの2亜種を含み、日本の野外で見つかるのはほとんど前者である。千葉、東京など各地で野外繁殖しており、岐阜県でも十分に繁殖し得る。背甲長40cmを超えることがある大食いのカメで、地域の食物連鎖を攪乱する可能性が大きい。長い首を急激に伸ばして噛み付く習性があり、扱いには注意を要する。</p> <p><b>【県内分布】</b>羽島市(2例)、土岐市(1例)、可児市(1例)、各務原市(2例)の保護事例がある。県内での繁殖の証拠はまだ挙がっていないが、警戒が必要である。</p> <p><b>【市内分布】</b>2004年に市内で保護されている。</p>		 <p>撮影: 矢部隆</p>
<p><b>ミシシippアカミミガメ</b> <i>Trachemys scripta elegans</i></p> <p>脊索動物門 (CHORDATA) 脊椎動物亜門 (VERTEBRATA) 爬虫綱 (REPTILIA) カメ目 (TESTUDINES) ヌマガメ科 (Emydidae)</p> <p>外来生物(環境省指定): 要注意外来生物</p>	<p><b>【種概要】</b>北米原産で、雌は背甲長25~28cm、雄は20cm前後になる。耳の上に鮮やかな朱色の斑紋がある。性成熟に達した雄の前肢の爪は長く伸び、高齢な雄は黒化して体全体が黒っぽくなる。</p> <p>配偶期は秋と春で、冬には水底で越冬する。6~7月を中心に1回当たり10~15個の楕円体の卵を年2回産む。孵化個体は産卵巣で越冬し、翌春地上に現れる。雑食性であるが、高齢な個体は草食性が強くなる。</p> <p><b>【県内分布】</b>美濃地方全域で分布拡大中であり、個体数も急増している。</p> <p><b>【市内分布】</b>北部や西部の山地を除く市全域に分布している。</p>		 <p>撮影: 吉村卓也</p>